

前号で開幕の様子をお伝えした海外組の動向。日本同様、シーズンはさらに進んでいる。飛躍のキッカケをつかみつつある選手、開幕から白星をつかめぬままの選手などなど、さまざまな表情をお伝える。

なお、今月のクローズアップは、ホンダ、ホンダ熊本を経て、ドイツに渡った榎田亮介選手をご紹介します。

Close-up of this month

安定を捨てて挑戦

前々回の第29回日本リーグ終了時点で、ホンダ、ホンダ熊本での5シーズンの通算得点は31。ホンダでは名手・ストックラン選手や茅場清選手の陰に隠れ、ホンダ熊本移籍後も足首や肩の故障でDFのみの出番も少なくなかった。

迎えた前回の第30回リーグ。榎田亮介は強い決意を固めて臨んだ。

会社の方針変更もあり、年々、縮小傾向と、先の見えないチームで終わりにたくない。

しかし、他のチームに売り込めるだけの実績もない。

少しでも自分に目を留めてもらわなければ。

必死のプレーを展開し、第30回リーグは過去5回の通算を上回るフィールドゴール69点をマーク（全試合得点）。

人事を尽くした榎田の周囲も動く。

ホンダ熊本の同僚だった吉田耕平選手（チョコレートボーイズ）を通じ、自分のプレーを編集したDVDをブルーノ・プラマニス選手に見てもらったところ、「海外で充分プレーできる」の評価。

ときを同じくして国内の有力チームからも、貴重な左腕に誘いの手が伸びた。

国内、海外、そして、夢を諦め、安定した優良企業に骨をうずめて働くという選択肢も考えられる立場。

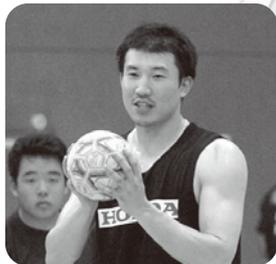
その中から、プラマニス選手のひと言が「お世辞半分にしても強く意識するキッカケに」なってふくらんでいった海外移籍の夢。

「生活に不自由ないサラリーを得られるかどうか」

「活躍&出場のチャンスがつかめる可能性が高いか」

「トレーニングが充分につめるか」

この3つの判断基準を設定し、海外でのクラブを探した上で、



榎田 亮介

1977年6月生まれ、29才、奈良県出身。一条高、中部大、ホンダ、ホンダ熊本でプレー。今季からドイツ・ピルナに身を投じた左腕ヒッター。

国内か海外でのプレーを決断することに。

吉田選手らを通じ、自作プロモーションDVDを送付。

その結果、エストニア、スウェーデン、ドイツの数クラブが興味を示し、4月下旬から5月上旬の約10日間、各クラブのトライアウトに参加。

首尾よくスウェーデンとドイツのチームから具体的なオファーを受けた。

残ったのはドイツ2部リーグのアウエ。植松伸之介選手が移籍したチームだ。

ドイツか国内移籍か。

悩んだ末、「まだ若いと思っても、来年は30才。これがラストチャンスだろうし、オファーがあるのに行かなければ、一生後悔するのでは？ 逃げたと感じるのでは？」と、海外移籍を決断した。

5月下旬から話が進み、アウエ側からは「契約に問題はないので、7月下旬にドイツに来てほしい」と連絡が入り、正式な契約書は送られてこないままだったが、「移籍を公表してもかまわない」とのことで、自身のブログなどでアウエ移籍を公表。

ところが、手はずを整えた出発4日前、「メインのスポンサーが降りたので、今シーズンは契約できない可能性が

高い。フライトはキャンセルしてほしい」のメールが。

植松選手も間に入って動いてくれたが、アウエでのプレーの道は断たれた。

絶望から力強く再起

それでも、もうあとには引けない。

日本の各地に指導や練習に行くかたわら、再び各国のクラブとコンタクト。

進みかけた話が突然音信不通となるケースも多く、周囲には明るく振舞いつつ、「こんなことしてて意味あるのか？」「このまま引退せなあかんのか？」「生活するのに追われてハンドボールすらできなくなるのでは？」といった不安が胸に渦まき日々。

刻々と時間が過ぎる中、現在、ピルナから具体的な契約内容を示したメールが届いたのが、8月のなかばだった。

ドイツの4部リーグ。

「やめたほうがいい」という人もいた。別のクラブに接触してくれていた人からは「もう少し待とう」と助言もされた。

だが、シーズン開幕の9月まで、残された時間はわずか。

「自分の目でピルナを確かめよう」と再びドイツへ。

3週間帯同した結果、3つの判断基準に合致するチームと確認し、正式契約。

ホッとひと安心するとともに、「これからが勝負」と意欲をみなぎらせた。

4部と聞くと、本場といえどもレベルを疑問視したくなるが、「聞いていたほど低くないです。波に乗れば、日本

リーグの中堅チームくらいの力はあると思います」と榎田。

チェコの代表選手やセルビアモンテネグロからの選手もいるし、なにより4部を制し、3部に上がるというモチベーションもチームに満ちあふれているのが魅力だ。

自然豊かで落ちついたピルナの街で、平日は午前中、ジムなどで汗を流し、午後は辞書を片手にドイツ語の勉強、そして夜8時すぎからの練習という日々を過ごし、週末に試合、というのが、一般的な1週間のライフスタイル。

コートではトップDFやサイドなど、新しいことに挑戦しつつ、チームの3部リーグ昇格に向けて、全力を注ぐ。

「長いスパンで、とにかく1年でも長く現役で。笑われるかもしれませんが、40才までプレーを続けたい」

不安がすっかりなくなり、みなぎる抱負、夢を語る榎田の表情は、じつにさわやか。

「所属が決まらない不安は他の選手には味わってほしくありませんが、大学から本格的にハンドボールを始めた僕でも、多くの人に支えられてなんとかスタートラインに立つことができました」

まずはアクションを自分から起こしてみることが大切。自ら動き出すことで意外なところから、協力者が現れたり、新たな出会いがあり道が開けていきます」

そんなポジティブなメッセージも送ってくれた榎田の成功を、そして、1年でも長い活動を、願ってやまない。

海外組 近況レポート

'06-'07シーズン版